

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>1998年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	1998年の歌会・歌合(全て自歌会・自歌合)	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:4首 歌人数:1名 自歌数:4首	『初恋四首』(はつこひよんしゆ)			評	派生歌など
1998	『若菜集』(1897)に初出の島崎藤村の詩『初恋』に着想を得つつ、恋の和歌を練習した。 原作:島崎藤村 和歌:岩崎純一 自撰					
1998/5/4	まだあげ初(そ)めし前髪(まへがみ)の 林檎(りんご)のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛(はなぐし)の 花ある君と思ひけり	前髪の花櫛の君見え初めて林 檎の香る夕暮の空	前髪に花櫛を挿したあなたをふと見初(み そ)めた。林檎の実の香る、この夕暮の空 に。			
1998/5/6	やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは 薄紅(うすくれなゐ)の秋の実(み)に 人こひ初(そ)めしはじめなり	恋ひ初めぬ薄紅の秋の実に薄 紫の今日の夕日に	あなたに恋し始めた。薄紅色の秋の林檎 の実の生るこの世界に。薄紫色の今日の 夕日の沈むこの世界に。	◇対句「薄紅、 秋、実//薄紫、今 日、夕日」		
1998/5/8	わがころなきためいきの その髪の毛にかゝるとき たのしき恋の盃(さかづき)を 君が情(なさけ)に酌(く)みしかな	わがころ情なき世の髪の毛の 恋の盃酌むつらさかな	我が心は、髪の毛の美しいあなたとの成就 しない恋の盃を一人で酌むという、情け容 赦ないこの現世のつらさの中にある。			
1998/5/10	林檎畑の樹(こ)の下に おのづからなる細道(ほそみち)は 誰(た)が踏みそめしかたみぞと 問ひたまふこそこひしけれ	おのづから細道ならぬ樹の下に 誰がと恋しさ問ふ人もなし	人が踏み固めないでできるはずもなく、今 現実に行っていない幻の細道の、その先 にある林檎の木の下には、「誰と一緒に土を 踏み固めてこの細道を作り上げてきたの かしら」などと、恋しさを遠回しに言うあなた はいない。			